

状態述語の分類：「所有する／所属する」を中心に

中村 たか子

(デジタルハリウッド大学)

要旨

状態述語について、近年、益岡（2008）、影山（2008）など、その振る舞いと分類に関し論考が深まってきている。筆者は中村（2007）で、「意味する・位置する」を例に動名詞「VNする」に状態述語があることを明らかにした上で、中村（2008）では恒常的属性と一時的属性についても討議した。本論はそれらの考察を発展させ、影山（2009a）で状態保持の他動詞と位置付けられた「所有する」、眞野・影山（2009）で出来事動詞と位置付けられた「所属する」に焦点をあて、両者は、状態性を持つ述語と分類されることが適当であることを示す。その過程で、中村（2008）で「一時的属性」としてその振る舞いに言及した「できる」についての観察をも加えて検証し、この2つの「VNする」が「準属性」でも「一時的属性」でもないことを述べるとともに、「第四種の動詞」（金田一1950）や益岡（1987）で提言された「中間型」の述語との相違点・類似点を挙げ、状態述語の分類にかかわる現象とその位置づけを討議する。

キーワード：状態述語のVNする、準属性、一時的属性、第四種の動詞、中間型

1. はじめに

状態述語についての考察は、活動・行為などの動態述語の考察の豊富さに比し多くはないが、近年、益岡（2008）編纂の『叙述類型論』はじめ、状態叙述・属性叙述に関する考察が増えてきており、動態叙述・事象叙述との違いなどが明らかにされつつある。従来、それぞれのタイプの間には境界が設けられ区別されてきたが、益岡（2008:7）が「属性叙述と事象叙述は相互に完全に分断されているのではなく‘通路’が開いている」と述べるように、その境界も

完全な境界ではなく、「事象叙述を表す述語（用言）が一定の条件のもとで対象の属性を表す場合がある」（益岡2008:7, 8）と考えられてきている。本稿では、この主張に着目し、中村（2007, 2008）での状態述語としての「VNする」「できる」の考察を踏まえ、状態述語の振る舞いとそれと関わる要素を記述的に特定する。

先行研究における叙述の類型を見ると、益岡（1987）が提言した「中間型」は時間的限定を受ける非内在的属性と静的な事象叙述の間に位置するものである。また、影山（2008）が提言した「準属性」は属性の下位範疇に属するものである。一方、中村（2007）では「VNする」を議論の対象語とし、ヲ格を取る「意味する」と二格を取る「位置する」を中心にその状態性を明らかにした。また、中村（2008）では、「意味する／位置する」などの状態述語に「恒常の状態＝恒常的属性」を表すものと「一時的属性／性質」を表すものの2つのタイプがあることを述べ、加えて従来の動詞分類で状態動詞として挙げられる「できる」が「一時的属性」として振る舞うことを観察した。筆者は、本研究を中村（2007, 2008）を発展させたものとして位置づけることとする。

本稿での議論は、「準属性」（影山2008）についての知見および「一時的属性」（中村2008）についての検証を基に、さらに本稿で新たな観察も加え、状態述語の分類に関わる現象を記述的に明らかにする。対象とする「VNする」は具体的には「所有する／所属する」である。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節では本稿の議論に関連する叙述のタイプと時間軸・時間幅の関係を中心に、先行研究、主に益岡（1987）、影山（2008）、眞野・影山（2009）、中村（2007, 2008）の主要点をまとめる。第3節では「所有する／所属する」について記述的観察を行っていく。まず、影山（2009a:88）で状態保持の他動詞とされる「所有する」、眞野・影山（2009:52）で出来事動詞とされる「所属する」が同じタイプの状態性を持つ述語であることを示す。次に、中村（2008）で一時的属性を表す状態述語とした「できる」について新たな観察を加え、「準属性」との振る舞いの相違を見るときも、対象語の2つの「VNする」が「準属性」の述語でも「一時的属性」でもないことを示す。さらに、この2つの「VNする」は、文末で「-ル・-タ」をとると不自然で、「-テイル」の形をとることで落ち着くことから、常に「-テイル」の形で文末に現れる「第4種の動詞」（金田一1950）との差異についても考える。

最後に、「中間型」（益岡1987）との類似点、相違点に言及する。第4節で本稿の観察をまとめ、「所有する／所属する」の状態述語の分類の中での位置づけを提言することで、叙述の類型への貢献を目指す。

2. 先行研究にみる状態性をもつ叙述について

本節では、内在的属性・非内在的属性・中間型（益岡1987）、及び準属性（影山2008）と場面レベル・個体レベルの状態（眞野・影山2009）について、主にその定義づけと叙述類型における位置づけについてまとめていく。さらに、中村（2007, 2008）で挙げた状態性を持つ「VNする」について振り返る。

2.1 「内在的属性」と「非内在的属性」と「中間型」

益岡（1987）は、(1)を時間的限定のない本質的な属性を叙述した表現とみなす一方、(2)のような時間的限定を受ける一時的な属性を叙述した表現を挙げ、これらの属性叙述を区分するためそれぞれを「内在的属性」と「非内在的属性」という名称で呼び分けた。

(1) 花子はわがままで。

(2) 花子はパーティの間中、ずっとわがままだった。

→パーティの間の花子はわがままだった。（益岡1987：33）

さらに、対象の性質・特徴を表す内在的属性の叙述（3）と、対象の習慣的動作等を表す非内在的属性の叙述（4）を動詞述語の例として挙げている。

(3) マウンテンゴリラはアフリカ中央部の高原だけに生息する。

（益岡1987:29）

(4) ビリケンさんは新聞を声にだして読むのである。（北杜夫「楡気の人びと」）

（益岡1987:28）

また、非内在的属性の叙述については「時間的限定を受ける点で、静的事象の叙述に部分的ではあるが類似した性格を有する」（益岡1987:34）と述べ、非内在的属性叙述文と静的事象叙述文との中間的な性格をもつ「中間型」¹とし

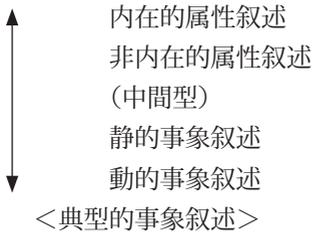
て（5, 6）のような例も挙げている。

（5）月の出前の海は大そう暗かった。（益岡1987:34）

（6）付近は家屋が密集し、一時は大混雑でした。（益岡1987:34）

この「中間型」について、益岡は（7）を提示し、「連続体の形で表したのは、各類型間の境界が実際には連続的な性格のものであるように思われるからである」（1987:35）と述べている。これらの「中間型」の例については、以下3.6で再度扱う。

（7） <典型的属性叙述>



（益岡1987:35）

2.2 属性と準属性

影山（2008）は、事象叙述は一時点あるいは開始時や終了時を明示できるが、属性叙述は一時点あるいは開始時や終了時を明示できないと述べる。一方、時間の流れにおいて不変の性質を表現する属性とは別に、時間的に変動する可能性のある属性として新たに「準属性」というカテゴリーを提言している。（9）は（8）と同様に、開始や終了の時間を明確にできず、また特定の時間を明示的に限定することもできない属性叙述であり、通常の出來事と異なる。

（8）ゾウは、*2005年から2008年まで／*2月4日に鼻が長かった。

（9）西洋人の男性は、*2005年から2008年まで／*2月4日に女性に優しくかった。

ところが両者は、（10, 11）のように「ふだんは」との共起において異なる振る舞いをする。

- (10) *ゾウは、ふだんは鼻が長い。 (影山2008:23)
 (11) 西洋人の男性は、ふだんは女性に優しい。 (影山2008:26)

(10) のような不変的な状態を表す「属性」は「ふだんは」と共起しない。(11) の「西洋人の男性」の属性を表す「優しい」は恒常的に不変ではなく「ふだんは」と共起する。このことから影山 (2008) は「優しい」などを「出来事と属性の中間的な存在」である「準属性」とした。

2.3 場面レベルと個体レベルの状態

眞野・影山 (2009) は、「時間軸 (時間幅) の認識」を「しばらく」との共起、「時間による展開」を「2、3日前に」との共起、「現在時制で現在の事実を表す」を「動詞のル形」で検証し、「叙述の種類」として<表1>を掲げている。

<表1> 叙述の種類 (眞野・影山2009:48)

	叙述のタイプ		
	A. 事象		B. 属性 (個体レベル の状態)
	1. 出来事	2. 状態 (場面レベルの状態)	
時間軸 (時間幅) の認識	○	○	×
時間による展開	○	×	×
現在時制で現在の事実を表す	×	○	○

<表1>では、叙述のタイプは大きく「A. 事象」と「B. 属性」の2つに分けられ、「A. 事象」はさらに「1. 出来事」と「2. 状態」に下位区分されている。

2.4 状態述語としての「VNする」：「恒常的属性」と「一時的属性」

和語において状態性を持つ動詞は限られている²。中村 (2007) では、平尾 (1990) で他動詞として分類され、また影山 (1993) で非対格自動詞として分類される語群において他の「VNする」とは異質な「VNする」に注目し、種々の記述的観察から状態性述語の振る舞いをする「VNする」が複数存在することを示した。例えば、反復性の副詞「よく」は、(12) に示すように状態述語

とは相容れない。議論の対象となる「VNする（意味する／位置する）」は静態動詞「値する」と同様の振る舞いをするが、他動詞「調理する」・非能格自動詞「散歩する」・非対格自動詞「誕生する」の振る舞いとの違いは明らかで、(12)は「VNする」に状態性を認める検証法の1つとなる³。

- (12) a. *赤信号は止まれをよく意味している。 (中村2007:37)
 b. *日本列島は北半球によく位置している。 (中村2007:37)
 c. *彼の功績はノーベル賞によく値している。
 cf. a. 母が魚をよく調理している。
 b. 父がよく散歩している。
 c. 子牛がよく誕生している。

また、中村（2008）では、ヲ格を取る「意味する」とニ格を取る「位置する」を中心に、他動詞・非能格自動詞がもつ「動作・行為」を表す意味や非対格自動詞がもつ「出来事」を表す意味がこれらの「VNする」には見られないことを述べた上で、これらが状態性を持つ述語であることを示した。

さらに、和語の能力を表す状態動詞「できる」の観察も加え、「意味する／位置する」を中心とする「VNする」の状態性は恒常的属性とともに一時的属性をも表すことに言及した。(13)は文末の述語が一時的属性を表す例である。(13b, c)は主語の語彙情報が述語の意味に「一時的」解釈を与えている⁴。一時的属性については、能力を表す「できる」を例に後の3.2で詳しく述べる。

- (13) a. 太郎は英語ができる。
 b. 彼の出場はトーナメントの混戦を意味する＝意味している。
 c. 彼の成績は学年のトップに*位置する＝位置している。
 (中村2008:185)

3. 「所有する／所属する」についての記述的観察

3節では、本稿で議論の対象とする「所有する／所属する」について記述的観察を行っていく。

3.1 「所有する／所属する」の状態性

本稿で議論の対象となる「所有する」はその前にヲ格をとる動詞であり、「所属する」はその前にニ格をとる動詞である。「所有する」は影山（2009:88）で状態保持の他動詞、「所属する」は眞野・影山（2009:52）で＜変化→状態＞の要素を含む出来事動詞とされている。

まず、「所有する／所属する」が文末でどのような形をとるか見てみよう。

- (14) a. Y氏は外車を所有*する／している／*した／していた。
cf. Y氏は外車を購入する／した／している／していた。
b. K君は野球部に所属*する／している／*した／していた。
cf. K君は野球部に入部する／した／している／していた。

「所有する／所属する」はテイルを伴わずに「-ル・-タ」で文末に現れることがない。よって、この2語は「現在時制で現在の事実を表す」とは言えない。

さらに、中村（2007）での反復性の副詞「よく」との共起可能性についての観察（12）を援用し、（15, 16）でこの2つの「VNする」の状態性について観察する。

- (15) a. Y氏は外車を所有している。
b. *Y氏は外車をよく所有している。
(16) a. K君は野球部に所属している。
b. *K君は野球部によく所属している。

（15b, 16b）は、「所有する」「所属する」が静態動詞としての特徴を持つことを示している。

ここで、影山（2008）＜表1＞の観察を援用する。影山は「時間による展開」を「2, 3日前に」との共起によって見ているが、ここでは時間幅「しばらく」との共起を見る観察と混同しないよう、さらに短い時間設定「今日」との共起により「時間による展開」を見る。

- (17) a. Y氏はしばらく／*今日外車を所有している。

(18) a. K君はしばらく／*今日野球部に所属している。

以上の観察から、「所有する／所属する」は<表1>で示した事象叙述の下位タイプである「場面レベルの状態」とも異なる振る舞いをしていることが判明した。よって、事象叙述の範疇に入る述語とは言い難く、両者は状態性を持つ属性タイプの動詞であると言える。

3.2 「準属性」と「一時的属性」との相違

中村（2008）では、恒常的属性とは異なる「一時的属性」としての「できる」を提示した。「できる」を述語としてとる文は、以下の3つの例が挙げられる⁵。

- (19) a. 太郎は英語ができた
b. 軽自動車は駐車ができた。
c. 夕飯ができたわよ。

(19a)の「できた」は太郎の能力を表す状態動詞であり、(19b)の「できた」は可能構文の述語となる動詞「する」の可能形である。また、(19c)の「できた」は「着く」のような到達動詞と考えられる。このように「できる」は多義性のある動詞と言える。ここでは能力を表す「できる」(19a)について、中村(2008)での観察を以下に示す。

(20) *ずっと彼女は青い目をしていた。 (中村2008:187)

『恒常的状态＝恒常的属性』はわざわざ継続の副詞をもって表現する必要がないので、副詞『ずっと』と共にせず、非文となる（中村2008:188）ことを示す例が(20)である。この検証に加え中村(2008)では、影山(2004)の「親族名詞＋アル」構文と「出来事名詞＋アル」構文について時間的な長さを表す副詞「ずっと」との共起を観察し、属性とは異なる「一時的属性／性質」(22)を提言している。

(21) a. 彼には配偶者がある。＝彼は妻帯者だ。【属性】

- b. シンポジウムには参加者があった。＝シンポジウムは盛会であった。
【性質】 (影山2004:19)
- (22) a. ずっと彼には配偶者がある。＝ずっと彼は妻帯者だ。【一時的属性】
b. ずっとシンポジウムには参加者があった。
＝ずっとシンポジウムは盛会であった。【一時的性質】
(中村2008:188)

(22) での観察を(19a)で行うと以下ようになる。

(23) ずっと太郎は英語ができた⁶。(中村2008:187,189)

よって、中村(2008)では「ずっと」と共起する「できた」(23)を「恒常的属性」ではなく「一時的属性」を表す状態述語とした。「英語ができる」というのは、一生変わらない恒常的な能力ではない。また、英語を身に付ける前にはなかった社会的な身分・立場を「英語ができる」ということで具えたという意味で、一時的な属性を示すとも言える。

加えて、影山(2008)での観察、「ふだんは」との共起を見ることは「時間的に変化する可能性の有無」を検証することになる。

- (24) a. 西洋人の男性は、ずっと女性に優しい。
b. 西洋人の男性は、ふだんは女性に優しい。(=11) (影山2008:26)
cf. a. *西洋人の男性は、よく女性に優しい。
b. *月曜日から土曜日まで西洋人の男性は、女性に優しい。
c. *11時に西洋人の男性は、女性に優しい。
- (25) *太郎はふだんは英語ができた。
cf. a. *太郎はよく英語ができた。
b. *月曜日から土曜日まで太郎は英語ができた。
c. *11時に太郎は英語ができた。

影山(2008)では、「優しい」は準属性タイプの述語であると述べられている。また中村(2008)では、「ずっと」と共起する能力を表す「できる」を「一時

的属性」とした。「優しい」と「できる（能力）」は似た振る舞いをするが、「ふだんは」と共起するかどうかを検証することにより、新たな観察を得た。つまり、「優しい」は時によって変わる可能性があるが、「できる（能力）」は時によって変わる可能性がない。言い換えれば、その状態を保持する時間幅がより長いと言える。しかしながら「ずっと」と共起することから、双方とも「恒常的属性」ではないのである。

以上の観察を踏まえ、対象語「所有する／所属する」について「ずっと」「ふだんは」との共起を次に示す。

- (26) a. Y氏は外車をずっと所有している／していた。
 b. K君は野球部にずっと所属している／していた。
 (27)⁷a. Y氏は外車を*ふだんは所有している／していた。
 b. K君は野球部に*ふだんは所属している／していた。

「所有する／所属する」は能力を表す「できる」と同様、「ずっと」と共起するが「ふだんは」とは共起しない。

影山（2008）、中村（2007, 2008）を基にした観察（14～18）（23～27）の結果を<表2>にまとめる。

<表2> 3.1、3.2における観察

タイプ	準属性	一時的属性	??	??
観察	優しい	できる(能力)	所有する	所属する
① 現在時制で現在の事実	○	○	—	—
② 反復性の副詞「よく」	×	×	×	×
③ 時間軸（時間幅）の認識	×	×	○	○
④ 時間による展開	×	×	×	×
⑤ 「ずっと」との共起	○	○	○	○
⑥ 「ふだんは」との共起	○	×	×	×

本項では、「所有する／所属する」に「準属性」（優しい）とも「一時的属性」（できる）とも異なる振る舞いが観察された。

3.3 「第四種の動詞」の振る舞いとの違い

3.1で見たように「所有する／所属する」は文末で「スル／シタ」の形を取らない。本項での議論のため（14）を再掲する。

- (28) a. Y氏は外車を所有*する／している／*した／していた。
b. K君は野球部に所属*する／している／*した／していた。 (=14)

「所有する」「所属する」は文末で「-ル・-タ」を取ると座りが悪く不自然である。この2つを例とする「VNする」は文末では常に「-テイル」となる⁹。

ここで想起されるのが、金田一（1950）が提唱した「第四種の動詞」である。「第四種の動詞」は文末では常に「-テイル」の形で用いられる。この種の動詞を中谷・影山（2009：40）は「疑似瞬間動詞」あるいは「疑似到達述語」であるとし、その振る舞いは「『（電気が）ついている』のように、あたかも状態変化の結果状態を表しているかのように振る舞っておきながら、その状態変化が現実には起こっていない」と述べ、「結果状態を引き出すテイルなしには用いられない」とする。

- (29) a. 彼の仕草は父親に*似る／似ている／*似た／似ていた。
b. マッターホルンは目の前に
*そびえる／そびえている／*そびえた／そびえていた。

「第四種の動詞」（29）の文末での振る舞いは（28）と同様であるが、連体修飾（30）にするとその振る舞いは（31）と異なる¹⁰。

- (30) a. 父親に[?]似る = 似ている = 似た ≠ 似ていた彼の仕草
b. 目の前にそびえる = そびえている = そびえた ≠ そびえていた
マッターホルン

- (31) a. N氏が所有する＝している≠した＝していた外車
 b. K君が所属する＝している≠した＝していたチーム

「所有する／所属する」は連体修飾節で「スル＝シテイル」が現在の状況を表しているのに対し、第四種の動詞は「ル＝テイル＝タ」が現在の状況を表している。(28～31)の観察から、「所有する／所属する」には「第四種の動詞」との差異が認められ、異なる範疇の動詞と推測される¹¹。ただし、両者ともに文末で必ず「-テイル」の形をとることから、状態動詞の少ない日本語の特徴として「テイルを組み合わせることで状態性のある述語を作り出す」という中谷・影山（2009:41）の指摘に注目し、さらに両者の振る舞いを見ていきたい。以下で観察する「所有する／所属する」の文例は文末で「-テイル」の形をとる(14＝28)とする。

3.4 文末で常に「-テイル」となる「VNする」

3.3でも述べたように、文末で常に「-テイル」となる「第四種の動詞」を中谷・影山（2009:40）は「その状態変化が現実には起こっていない」と分析している。「所有する／所属する」はどうであろうか。以下で、「時間による展開」、つまりある時点の前と後で変化するかどうかを見る眞野・影山（2009）の観察を行うことにする。「第四種の動詞」は常に「-テイル」で現在の状態を表しているので未来を表す副詞句とはもともと共起し得ない。そこで(32)では、副詞句「今年の初め」と共起するか否かを文末が「-テイタ」の文で見ることにする。同時に「よく」、「時間幅の認識」、「ふだんは」、「ずっと」についての観察も併記する。また、本項での議論のため、「所有する／所属する」についての観察も(33)に再記する。

- (32) a. *よく／*今年の初め／*一昨年末から昨年末まで／*ふだんは／*ずっと
 彼の仕草は父親に似ていた。
 b. *よく／*今年の初め／*一昨年末から昨年末まで／*ふだんは／*ずっと
 マッターホルンは目の前にそびえていた。
- (33) a. *よく／今年の初め／一昨年末から昨年末まで／*ふだんは／*ずっと
 Y氏は外車を所有していた。

- b. *よく／今年の初め／一昨年末から昨年末まで／*ふだんは／ずっと
K君は野球部に所属していた。

(33) において今年の初め外車を「所有していた」Y氏は、今は外車の所有者ではなく、また、今年の初め野球部に「所属していた」K君は、今は野球部の部員ではない。つまり、Y氏もK君も「売却する」「退部する」という<行為／活動>をある時点で行った後に非所有、無所属という現在の状態に変化したと考えられる。

これに対して、「第四種の動詞」は「似ていた」「そばえていた」という状況になる前に、変化をもたらす<行為／活動>を行っていたわけではない。つまり「第四種の動詞」は<行為／活動>を何ら含意していないが、「所有する／所属する」には<行為／活動>の含意が認められる。「第四種の動詞」と「所有する／所属する」にはともに文末で「-テイル」をとるが、(32,33)の観察を見る限り、両者には異なる振る舞いが観察される。

3.5 従属節「～ながら」による検証

ここでは、従属節を作る「～ながら」の表現をとった時、どのような意味になるかを見ていく。従属節を作る「～ながら」は活動動詞とともに用いられた時は「同時進行」の意味となるが、状態動詞や到達動詞とともに用いられた時は逆接の意味となる¹²。

- (34) a. Y氏は新聞を読みながら、コーヒーを飲んでいる。
b. K君は草の上に寝転びながら、雑誌を読んでいる。
c. 彼は電話のそばにいながら（＝いるのに）、受話器をとらなかった。
d. 駅前に公衆電話がありながら（＝あるのに）、
今では誰もそれを使おうとはしなかった。
e. 列車は定刻通りにA駅に着きながら（＝着いたのに）、
終点では1時間の遅れが出ていた。
f. 冬の海に落ちながら（＝落ちたのに）、その子は幸運にも助かった。

(34a, b) は活動動詞、(34c, d) は状態動詞、(34e, f) は到達動詞であるが、(34c,

d, e, f) の従属節と主節は逆接の関係になっている。以下に、能力の「できる」、形容詞、「第4種の動詞」にも「～ながら」の検証を試みた。

- (35) 太郎は英語ができながら、友人にはそれを隠していた。
(36) 京都の女性は物腰は柔らかいながら、芯は強いと言われている。
(37) a. あの学生は理論面では優れていながら、
実技面ではまだまだ努力が必要だ。
b. あのコンビニは幹線道路に面していながら、
開店して日が経っても客足が伸びない。

(35)「できる」が状態性を持つことはここでも観察された。また(36)形容詞「柔らかい」、(37) 第四種の動詞「優れている」「面している」は現在の状態・形状を表す語として、その状態性が「～ながら」による逆接の従属節を成立させている。

- (38) a. Y氏は外車を所有しながら／所有していながら（＝所有しているのに）、
さらに国産車を購入した。
b. K君は野球部に所属しながら／所属していながら（＝所属しているのに）、
サッカー部の試合に出た。

(38) の「所有する／所属する」が「-テイル」の助けを借りずに逆接の意味となっていることに注目したい。この2語の振る舞いに一時的属性の「できる（能力）」や形容詞、第4種の動詞と同様の振る舞いを確認した。

3.6 「中間型」について

ここまで「所有する／所属する」の状態性を考察してきたが、2.1で挙げた益岡（1987:34）の「中間型」を示唆する述語（5,6）について、上記の9つの検証項目から、その振る舞いを見てみよう。（5,6）を再掲する。

- (5) 月の出前の海は大そう暗かった。 (益岡1987:34)
(6) 付近は家屋が密集し、一時は大混雑でした。 (益岡1987:34)

以下、(39, 40) で観察する¹³。

(39) a. ??よく／しばらく／今日／ふだん／*ずっと

月の出前の海は大そう暗かった。

b. 月の出前の海は大そう暗い／暗かった。

c. 大そう暗い≠暗かった海

d. 月の出前の海は大そう暗いながら、舟をこぎ出すには支障なかった。

(40) a. *よく／しばらく／*今日／*ふだん／*ずっと付近は家屋が密集していた。

b. 付近は家屋が密集*する／している／*した／していた。

c. 密集する＝している＝した≠していた家屋

d. 付近は家屋が密集しながら、日が暮れると辺りに人影はなかった。

(39)「暗かった」は影山(2008)が準属性とする「優しい」と同じく形容詞であるが、その振る舞いは異なる。「暗い」海は月が出れば明るくなるので、準属性の「優しい」よりも短い時間幅で変わる可能性があると考えられる。また(40)「密集する」の振る舞いには、連体修飾節による検証(40c)以外では「所有する／所属する」とほぼ同様の振る舞いが観察されることから、両者は非常に近い範疇に属するものであると考えられよう。

4. まとめ

本稿では、先行研究で扱われた「状態性」と関わる現象として、9つの項目を検証した。その結果は、<表3>である。

＜表3＞ 述語の分類

述語の種類 例 観察	準属性	一時的属性	第四種の動詞	中間型		???
	優しい	できる	似る そびえる	暗い	密集する	所有する 所属する
①現在時制で現在の事実	○	○	—	○	—	—
②よく	×	×	×	??	×	×
③時間軸の認識	×	×	×	○	○	○
④時間による展開	×	×	×	○	×	×
⑤ずっと	○	○	×	○	○	○
⑥ふだんは	○	×	×	○	×	×
⑦連体修飾の振る舞い	イ（現在） タ（過去）	ル（現在） タ（過去）	ル（現在） テイル（現在） タ（現在） テイタ（過去）	イ（現在） タ（過去）	ル（現在） テイル（現在） タ（現在） テイタ（過去）	ル（現在） テイル（現在） タ（過去） テイタ（過去）
⑧テイル形の意味	—	—	○ 現在の状態	—	○ 現在の状態	○ 現在の状態
⑨ 逆接「～ながら」	○	○	○	○	○	○

＜表3＞から分かるように、「所有する」（影山2009a）と「所属する」（眞野・影山2008）は、これら9つの検証項目に照らせば、同様の振る舞いをする「VNする」ということになり、異なるタイプの動詞とは言えない。「所有する」と「所属する」を異なるタイプの動詞とする根拠を再検討する必要がある。次に、能力を表す「できる」と「優しい」は、「ふだんは」との共起を見る観察以外では同様の振る舞いをする状態述語と言える。時間的に変化する可能性がある準属性「優しい」は、恒常的なものではない「英語ができる」能力よりも短い時間で変化する可能性を持つ。「英語ができる」能力は恒常的ではないがある

程度以上の時間変わる可能性がなく、一時的属性と言う範疇に入る述語である（中村2008）ため、準属性より恒常的属性に近いと考えられる。また、「所有する／所属する」には、影山（2008）が提示した準属性とも、一時的属性の「できる（能力）」とも、また金田一（1950）の「第四種の動詞」とも異なる振る舞いが観察される一方、中間型（益岡1987）の「密集する」とは、連体修飾節による検証以外ではほぼ同様の振る舞いが観察されたことにより、この2つの「VNする」は中間型の「VNする」に近いタイプと考えられよう¹⁴。

本稿で挙げた述語の振る舞いに少しずつ違いがあるという観察結果は、「各類型間の境界が実際には連続的な性格のものであるように思われる」と述べる益岡（1987:35）や、事象と属性の「2つの世界は完全に分断されたものではない」とする影山（2009b:30）の主張を支持するものである。また、中間型の「密集する」（益岡1987）とほぼ同じ振る舞いをする「VNする」（所有する／所属する）を本稿で提示することで、中間型の存在をより具体的にすることができた。しかしながら「所有する／所属する」と中間型の「密集する」には僅かな差異があることも事実で、この差異について考えていくことが今後の課題として残された。

単純和語の述語に比べ「VNする」には状態性を持つものが数多く見られる。近年、叙述タイプの精緻化が進む中、本稿で示した「VNする」を中心に観察した「状態述語の分類」、その分類に関わる現象の整理は、叙述の類型を論じる上で意義あるものと考えられる。

謝辞

本論を故井上和子先生に捧げます。井上先生が主催された「井上ゼミ」では、日本語教育とは異なる視点から日本語について考える機会を得、恵まれた時を享受しました。心より感謝いたします。また、本稿の執筆にあたり研究当初よりご指導を賜った修士論文指導教官の長谷川信子先生、井上ゼミ遠藤喜雄先生に感謝申し上げるとともに、ご丁寧かつ貴重なコメントをくださった査読者の岩本遠億先生、長谷川信子先生にお礼申し上げます。さらに上田由紀子氏・藤巻一真氏をはじめとする井上ゼミの諸先輩、上原由美子氏・眞鍋雅子氏・田所直子氏をはじめとするKUIS日本語教育研究会の方々はこの場を借りお礼申し上げます。

注

1. この「中間型」については益岡（2000）でも「暗い、騒がしい、ご機嫌だ」の例が挙げられていて、今後の検討課題とされている。また岩男（2008:176）は「中間型の位置づけに関する研究が待たれている」と述べている。
2. 和語の状態述語の多くは形容詞であり、動詞では「居る・ある」「要る」、可能形（話せる、見える他）、「できる」程度である。「できる」については、以下で扱う。
3. 中村（2007:36,37）を参照されたい。
4. 中村（2008:184,185）を参照されたい。
5. 本稿では煩雑さを回避するため、一時的属性としての「VNする」（意味する／位置する）の例は省くこととする。
6. 「14歳のころからずっと太郎は英語ができた」などのように開始（終了）時点を明示するとより明確に「ずっと」との共起が確認できる。
7. 「ふだんは」との共起の観察については、査読者より許容するとのコメントを受けたが、本稿では筆者も含め複数の日本語教師からの判定により「非共起」で論を進める。また、「ふだんは」の類義語「いつもは」との非共起の例も参考のため挙げる。
 - a. Y氏は外車を*いつもは所有している／していた。
 - b. K君は野球部に*いつもは所属している／していた。
8. 以下にヲ格／ニ格をとる「VNする」の例を挙げる。これらの「VNする」には「-テイル」なしに「-ル・-タ」で文末に用いられると落ち着きが悪くなるという共通点がある。

例）占有する、保有する、包含する、保持する、所持する／位置する、分布する、群生する、内在する、混在する。
9. (30,31) の等号＝は同義、不等号≠は異義を表す。
10. 「できる」の連体修飾節での振る舞いは以下である。
 - a. 英語ができる≠*できている≠できた≠*できていた太郎
 - b. 大型車が駐車できる≠できている＝できた≠できていたスペース
 - c. 3分でできる≠できている＝できた≠できていたラーメン
11. 庵他（2001:432,433）、森山（1989:841-843）、益岡隆志・田窪行（1992:195,196）
12. 形容詞述語「暗かった」は、準属性「優しい」との比較のため検証するが、動詞とは異なるため一部の観察はできない。また、名詞述語「大混雑でした」については本稿での観察を割愛する。
13. 形容詞「暗い」については、品詞の違いもあり文末での述語の振る舞いとしては相違点が多く観察された。検証法に検討が必要であろう。

参考文献

- 庵功・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 § 32.スリーエーネットワーク.
- 岩男考哲（2008）「叙述類型研究史（国内編）」益岡隆志（編）『叙述類型論』 163-191. くろしお出版.
- 影山太郎（2004）「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」『日本語の分析と言語類型－柴谷方良教授還暦記念論文集』 くろしお出版.
- 影山太郎（2008）「語形成と属性叙述」益岡隆志（編）『叙述類型論』 23-43.くろしお出版.
- 影山太郎（2009a）「出来事を表す受身」影山太郎（編）『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 78-119. 大修館書店.
- 影山太郎（2009b）「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』 136:1-33. 日本語言語学会.
- 金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』（1976） 5-26. むぎ書房.
- 中谷健太郎・影山太郎（2009）「語彙的アスペクト」影山太郎（編）『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 13-42. 大修館書店.
- 中村たか子（2007）『状態述語としての「VNする」－「意味する」は状態を意味する－』神田外語大学修士論文.
- 中村たか子（2008）「状態述語としての『VNする』－『意味する』と『位置する』を中心に－」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム4』 163-194. ひつじ書房.
- 平尾得子（1990）「サ変動詞をめぐって」『特兼山論叢』 24号 57-73. 大阪大学.
- 眞野美穂・影山太郎（2009）「状態と属性」影山太郎（編）『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 43-75. 大修館書店.
- 益岡隆志（1987）『命題の文法』 6-37.くろしお出版.
- 益岡隆志（2000）「属性叙述と事象叙述」『日本語文法の諸相』 39-53. くろしお出版.
- 益岡隆志（2008）「叙述類型論に向けて」益岡隆志（編）『叙述類型論』 3-18. くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版.
- 森山良行（1989）『基礎日本語辞典』 840-844. 角川書店.